

変わっていくもの

有馬 達也

成人式のあった日の夜。私は招待状を手に、中学校の同窓会へと出かけた。

正直なところ一番強く感じていたのは、楽しみだとか、喜びなどではない。かつての同級生たちの前に立つのが怖い、そんな気持ちだった。

中学時代の私を一言で言い表すなら、「被虐者」。クラス中から蔑まれ、一挙一動を笑いものにされ、ひたすら人目を避けて過ごす毎日。部活動も、修学旅行も、楽しかった思い出にカウントされるものは何一つないと言っている。

店に入り、予約された部屋に向かうと、中には既に何人かの姿があった。その中の一人は、中学卒業時の担任教諭。

私の顔を見るなり、担任が名前を呼ぶ。私は思わず苦笑した。それは私ではない、別の同級生の名。幹事の指摘で間違いに気づいたようだが、私の存在の程度を改めて思い知らされる。

暫くすると元同級生たちが続々と現れ、空いた席を埋めていく。近くに座った者同士、近況を確かめ合いながら、昔を懐かしんで言葉を交わす。私は一人、黙ったまま周りの様子を窺っていたが、そんな私にも隣や向かいの席に座った元同級生は声をかけてきた。

「変わってないな」

本人にそんな意図はなかったのだろうが、私には、その言葉が嘲笑としか受け取れなかった。中学を卒業して、高校三年間、そして大学でも二年間。厳密にはまだ二十歳を迎えてすらいない私にとって、五年という歳月は長い。当然、五年前の自分とは少なからず違うものだという思いはある。

だが、実際は、見た目も、性格も、そして立場も、大して変わってはいない。背は低く体は細いままだし、絶えず周囲の反応を気にしておどおどしてばかり。他人に何か言われても、怖くて言い返すことなんてできない。

昼間の成人式でもそうだった。私の立場は、容姿や挙動を笑いものにされる弄られ役のまま。やがて幹事の挨拶で同窓会が始まり、出席番号順に近況報告を促された。早々に自分の番を終えた私は、ウーロン茶に口を付けながら、元同級生たちの話に耳を傾ける。

大学に進学。就職して社会人。結婚、そして出産。皆、ただ歳を重ねただけではなく、言葉遣いや雰囲気まで昔よりも大人になっている。そんな姿が羨ましくて、悔しかった。

同窓会の後、そそくさと帰ろうとした私を幹事が呼び止めた。直前、酔った元同級生が車で帰ると言い出したのを一緒にあって制したことに對し、感謝の言葉を告げられる。

「ありがとう、助かった」

彼はそう言うが、私は殊勝なことをしたつもりはない。ルール違反を許せない性格だから、つい出しやばってしまっただけ。飲酒運転のように明らかな違法行為に対してなら良いが、些細な

違反まで頑迷なほどに目くじらを立てるものだから、空気が読めない奴、と白い目で見られた経験は少なくない。

それでも、感謝されて嫌な気はしない。私は少し恥ずかしく思いながら、小さく頷く。そんな私を見て、彼は予想外の言葉を呟いた。

「一緒に止めてくれるとは思わなかった。昔と変わったよね」

私は、言葉に詰まる。そんな、予想外と言われるような行動を取っただろうか。変わったなどと言われても、私は特に深く考えるでもなく、思うが儘にただけ。

そこまで考えて、はたと気づいた。

同窓会中、元同級生たちと言葉を交したが、昔のように一挙一動を弄る人はいなかった。近況を報告するかつていじめっ子には、当時の面影などなく、腹立たしいほどに大人びた雰囲気で物静かにしていた。

私自身は変わっていなくても、立場が同じとは限らない。周りが変わっているのならば、同じ私でも、その中での立ち位置は変わっていく。そんなことに、今さら気づかされる。

「携帯の番号交換しよう」

そう言われて、私は快く承諾した。誰かと電話番号を交換するのは、一年半ぶり。

中学校に入学してから八年。私は初めて、彼らと友達になった。